

アタベク・アフラーシヤープの反乱

北 川 誠 一

初めに

イルハン国のイラン統治がモンゴル・トルコ系遊牧民の圧倒的な軍事力を背景に行われ、彼等の支配が土着の社会と政治組織に大きな変化を与えたのは事実であろう。しかし著者は以前「ヤズド・カークイー朝とモンゴル人」⁽¹⁾を発表して、それは強調され過ぎてはならず、モンゴル帝国とイルハン国の時代を通して特に南イランを中心に土着の政治機構が維持あるいは再組織されたことを強調した。⁽²⁾ 言い替えるとイルハン国の支配組織の中では都市貴顕階層・イスラームの宗教的エリートと並んで在来の地方軍市政権が重要な役割を果たしていたのである。同様の研究は、ヤズド以外の他の地方政権についても行わなければならないが、ヤズドと並んでイラク・アジヤミー州の九県の一つである大ロルについて、筆者は既に「大ロル・アタベク領の成立」⁽⁴⁾、「大ロル・アタベク朝とモンゴル帝国」⁽⁵⁾を発表してそれぞれモンゴル帝国時代、イルハン国初期の大ロル支配の政治過程について述べたので、ここでは、イルハン国中期以降、アルグン・ハンからゲイハトゥ・ハン時代に至るモンゴル人と大ロル・ファズルイー朝との関係について特にアフラーシヤープの反乱に焦点をあてて考察したい。⁽⁶⁾

一、アタベク・アフラースィヤープの即位

先稿で述べたように、一二八五／六年頃死亡したアタベク・ユースフシャーにはアフラースィヤープ、アフマドの二子があつた。アフラースィヤープは父親の生存中はオルドに仕えていたが、ブカ・チンクサンの庇護を被り、やがてアタベクの位に即いた。このアフラースィヤープが、イルハン・アルグンの死後に起こした反乱については、ドーソン、ハワース、ミノルスキー、シュプラー、エグバール、ソトウーデ⁽⁷⁾などによつて述べられている。しかし、これらはどれも一様に簡略で、比較的詳細であるドーソンでも、ヴァッサーフの記述により、次の通りに述べるに過ぎない。「ルルの王侯アフラースィヤープは、モンゴル政権は終わりとなり、かくしてベルシャの王位はこれを奪還しようとする最初のイスラム王侯に属するべきであると考え、そこで兵を挙げてイスファハーンを占領した（二六九〇年）ジュマード一月・（一二九一年）五月」。摂政会議はドラダイリイダージーに万戸軍を授けてこれに対して進軍させ、かつ、イスファハーンおよびシーラーズ管区のモンゴル・イスラム諸軍隊に命じてこの將軍のもとに参加させた。ドラダイが近づいて来ると、イスファハーンの司令官は逃走した。ヤズド城はモンゴル軍によつて掠奪された。アフラースィヤープはマンジャシュト要害に逃げ込み、ルル地方は荒掠された」（佐口透訳、第五卷二四三頁）。ここでは、他の史料の記事との対比が行われず、事件の原因、過程、前後の事情も考慮されていない。これらの研究のうちドーソンの記述を初めとし、イルハン国史としてアフラースィヤープの反乱に言及するものは、この反乱をアルグン・ハン死後の空位期突発的に生じた一事件と見ているだけに過ぎない。また大ロル地方史の記述を意図するものも、事典の項目あるいは広かな概説の一節であるという所載文献の性質上、記述は説明的であつて、詳細さ、批判性の点では不十分であると言わざるを得ない。小稿では、アフラースィヤープの統治、反乱の経過を時間を追つて諸史料の記述

を批判しつつ詳細に述べよう。

さて、諸年代記は、こぞって、アフラースィヤーブの統治の悪政であったことを述べる。

先ず、『選史』(Qazwini/Nava'i, 546) には、アフラースィヤーブは父親に替わってアタベクの位に即いた後、遠近に不正の手を伸ばした。

とあり、『ヴァッサーフ史』(Vassaf/Ayati, 149) には、

アフラースィヤーブは、無教育、経験も少ない若者であった。幾度も軍隊の反乱にあって、自分の近くの者を苦しめることになった。このため国土は荒れ果て、臣民は救いの無い有様になった。

とある。そして彼の不正と失政について『ムンテハブッタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 46) には、

諸国の人々の責任 (havālat) と罰金 (masādirāt) に混乱と横領の手を伸ばし、そのため税の徴収はおおいに混乱した。

また『清浄園』(Mirikhvand/Rezaqlikhan, 4, 624) に

自分の祖先の代理人 (nawāb) であった者一人一人に、口実を設けて責任を問い、罰金を科した。

などがある。アフラースィヤーブが領内の富裕な人々に対し、没収・罰金の賦課を行ったことが、おぼろげに伺え知られる。更に具体的には、『選史』(Qazwini/Nava'i, 546) に、

ニザームッディーン、ジャラールッディーン、サドルッディーンのようなハザールスフ王の治世以来、彼らの王朝のヴァズィールであったホージャ達を忌むべき罰金と賦課で明白なる義務をおわせた。彼は狼がユースフに加えたような非難をし、剣で弾圧と圧迫を加え、それらの寛大なる家々を踏みしだいた。彼らの一族はイスファハーンに難を避けた。

とあるが、『ムンテハブッタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 46) に

その時に至るまで世界の人々の保護者であった寛大な家々を恐れと悩みの場所に変えた。州の富者はその弾圧の激しさに、イスファハーンに難を避けた。

と述べる。これらの記述はアフラーシヤーブが一般的に重税政策をしいたというのではなく、父親ユースフシャーの時代に徴税の実務に当たっていた人々と担税者に落度あるいは、不正があったことを主張して、過大な追徴金あるいは罰金をかけたものと見られる。これは、アルグン・ハンが即位前より財務長官シャムスディーン・ジュヴァイニー一族にいただいていた不信と同様のものである。ただ、アフラーシヤーブが、官僚に対していただいていた疑念が正当なものであったかどうか、あるいはアフラーシヤーブにそのような手段で資金を調達する何か具体的な必要があったのかどうかを判断する手がかりは記されていない。⁽⁸⁾

次に、アフラーシヤーブの対外政策で重要な位置を占めたのは、歴代のファズルイーエ家君主にとっても重大であったクーフ・イ・ギールイーエ(クフギルイーエ)問題であった。クーフ・イ・ギールイーエは、かつてファズルイーエ家がファールスのアタベクに仕えていたとき、ムハンマド、アブータール兄弟がアタベク・アクソソルから拝領した国であり、また後にハザールアスフがここを再征服し、さらにアバガ・ハンによってユースフシャーに与えられている。このように複雑なクーフ・イ・ギールイーエの帰属問題について、『ヴァッサーフ史』(Yasaf/Ayati, 149-150) に

あるとき、「クーフ・イ・ギールイーエ州は、ロレスターンと境を接している。古来その地の税はアタベクの請負額に含まれていた。もし、再び彼が所有せよとの勅命が有れば、ファールスの役所に属していた時よりも多くの税を国庫(ディヴァーン)に納めましょう」と述べた。イルハンは勅命を下し、クーフ・イ・ギールイーエは、ロ

ルのアフラーシヤープの所有する所となった。シーラーズの知事達は、「クーフ・イ・ギールーイエはシーラーズとロレスターンの間にある地域である。シーラーズの管轄から外れるとは言え、その管理は不可能ではない」と上奏した。イルハンはこの意見をよしとされ、クーフ・イ・ギールーイエを返還するよう幾度か命令を下した。ロルのアフラーシヤープは、其の都度言い訳を述べた。アタベクは、これにあきたらず、マーンジャシュトの砦を占拠し、その隊長達を殺した。次に全クーフ・イ・ギールーイエを自分の父の叔伯父の息子で、軍隊の英雄、部族の知恵者であったキズイルに与えた。このキズイルには、一人の剛胆な兄弟があつた。彼自身も戦争の技に巧みで、統治の術に明るかつた。また、寛大な性格であつた。彼は、一族の者の何人かがクーフ・イ・ギールーイエで、アタベクによって圧迫を受けたことが原因で、アタベク・アフラーシヤープと争つた。アタベクはその地方に軍隊を送つた。キズイルは、逃げてシーラーズに至つた。アフラーシヤープは、彼と彼の兄弟を恐れ、後に彼を懐柔した。彼は厳密な取り決めを行つた上で、帰国した。アフラーシヤープは、もし彼が本当に、行つた行為を悔いているのなら、ヴァズィールのジャラルッディーンを殺すように求めた。キズイルは、卑劣にも、無実と知りながら彼を殺した。

クーフ・イ・ギールーイエについては、既に先稿で述べたので繰り返す必要はないであろう。アタベク・ユースフシャーはイルハン・アバガによつてクーフ・イ・ギールーイエを与えられ、兵を出して其の地に住んでいたシュール人を討ち、シュールの族長ナジュムッディーンを敗死させている。『心魂の歓喜』『地理篇』に、「この地の税はアタベクの請負額に含まれていた」とはこの事を述べているのであろう。ユースフシャーが、自領に編入したこの地域がなぜシーラーズ領に含まれていたかを示す資料は無い。推測可能であるのは、ユースフシャーは、シュール人を放逐したものの有効な徴税・行政組織を確立することができず、一方シーラーズの当局は、この地方の徴税台帳を持つて

いたので従前どおり徴税を続けたのであろう。イルハン国においては所領支配権と徴税権が原理的には別個のものであることを知るのである。この事件が起こったのはクーフ・イ・ギールーイエの帰属はイルハンの裁定を仰いでいるから、アルグン・ハン生前のことであり、従って一二八〇年代後半であらう。

さて、アフラーシヤープとイルハンとの関係において、最も特筆すべきであるのは、アルグン・ハンの死後にアフラーシヤープの起こした反乱であるが、この反乱は、上記の大臣や徴税官等の人々のイスファハーン逃亡と関わりが深い。アフラーシヤープは大ロル領から逃亡した人々を引き戻すことを命じたが、『選史』(Qazwini/Navā'i, 546) には、

彼の父の従兄弟であつたキズイルを彼らの身柄を捕らえるために派遣した。この時、アルグン・ハンの計報がイスファハーンに知れ渡つた。フサームッディーン・オマル・イルヴァークーシュの息子達であるキズイルとサルグルシャーは、勇気を示し、イスファハーンでシャフネであつたバイドゥを殺し、町を掌握した。直ちに、ここに逃げてきていた人々を捕らえ、厳しく処刑した。

とあり、『ヴァッサーフ史』(Vasaf/Ayati, 150) には

この時、キズイルは、イスファハーンに兵を率い、市郊外を占領し、使者を送つて、ジャラールッディーン・ヴァズィールの身柄を求めた。町のシャフネは、タガチャル・ノヤンの婿バイドゥであつたが、この要求に兵を召集し、即座に威圧的な返事を送り、自ら彼らを撃退するために城門を出た。この時、何人かのロル騎兵が、突然彼を急襲し、彼の首をはねた。彼の軍隊は敗走した。法官達、知事たちは、キズイルと戦う気持ちはないと哀願して進み出た。

とある。また『ムンテハブタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 46) には、

アタベク・アフラーシヤーブは、自分の叔伯父の息子、キズイルを彼らの身柄引き戻しのために遣わした。たまたま、彼らのイスファハーン到着の時に、アルグンの死没が報じられた。キズイルとサルグルシャーは、好機到来と考え、イスファハーンのシャフネであるバイドゥを殺し、イスファハーンを占領した。

とある。このように、キズイル等のイスファハーン派遣の当初の目的は逃亡者逮捕であった。アルグンの死亡はこのような実力の行使のために好都合ではあったが、訃報を聞いたキズイルが直ちに反乱を決意したのではないようである。しかし、知事バイドゥと劔矛を交わし、あまつさえバイドゥを殺害したことによって、反乱は事実上開始された。

二、反乱の開始とその経緯

『ヴァッサーフ史』(Vassaf/Ayati, 150) には、

キズイルは、自分の弟サルグルシャーを町の中に派遣した。ロル兵はタクビールをあげて市内に入った。サルグルシャーは、ホージャ・バハーウッディーンの屋敷に居を構えた。アフラーシヤーブの名前で貨幣を鍛造し、市中でアフラーシヤーブは帝王であると宣言した。この時イスファハーンのならずものの一団がロル兵に加わり、彼らに自分の敵を殺すようにけしかけたので、多くの人々が殺された。

この様に、当初キズイルのイスファハーン派遣の目的は、イルハンに対する反乱のためでなく、あくまでも、逃亡者の逮捕のためであった。それらの人々は、サルグルシャーの入城後、『選史』(Qazwini/Navai, 546) には、

そこに逃げ込んでいた人々は捕らえられて、極刑に処せられた。

とあり、また『ヴァッサーフ史』(Vassaf/Ayati, 151) には、

サルグルシャーは数日後代官を選び、自分自身は町から出た。そのことから手が空いたので、あちこちを征服

しようとしたのである。キズイルも誇ってアフラーシヤープのもとに行き、我々はイスファハーンを征服し、今や貨幣と説教は彼の名で行われていると告げた。

とある。逃亡者逮捕のためにイスファハーンに派遣されたキズイルは、当初命令された権限を大きく逸脱して、知事を殺して町を占領し、アフラーシヤープの名前で硬貨を打ち、ホトバに彼の名前を入れさせたのである。

諸史料は反乱の原因について、明言しないが、アフラーシヤープ自身よりは、彼によって、イスファハーンに派遣されたキズイルとサルグルシャーが独断でシャフネのバイドウを殺害し、アフラーシヤープはむしろそれを追認したのであるように理解できる。『ヴァッサーフ史』(Yasaf/Ayati, 150)には、アフラーシヤープの性格が次の様に述べられている。

アタベク・アフラーシヤープは世間を知らない若者達の意見を容れて、租税(ḡal)の支払いを怠った。租税の徴収に下向する使者達に悪意をいだき、彼らを粗雑に取り扱った。アルグンの死が伝わると租税の徴収に来ていた使者達を殺害して、全然と反乱を起こした。アルグンの死後モンゴルの習慣どおり、しばらくの間諸道を閉鎖した。一切の情報が外部に伝わることも町に来ることもさせなかった。この無情報の状態が彼を大胆にした。モンゴル人の統治は終わったと考えた。その頃占星術師の計算にはムスリムの帝王が出現すると出ていたし、彼は富と軍隊の点で他の者に優っていたのでそのイスラム教徒の帝王というのは彼自身をさしているのだと考えた。この記事によると、彼はそもそもモンゴル人の支配を嫌い、軽視していたようである。しかも、当時彼の自尊心を満足させる予言が流布しだした。イランのムスリム君主でもっとも強大であったのは、東イランのクルト朝を除外すれば、明らかにアフラーシヤープであったのである。

一方、『マジュムルアンサーブ』の著者シャバーンカラーイーは別の原因を挙げる。シャバーンカラのマリク、

ムザッファルディーンは、アルグン・ハンの刺書と牌子を持参して帰国した一族のバハーッディーンを入国させなかったが、ついにモンゴル軍に敗れ、ケルマーンで逮捕された。彼はしばらくオールドに留め置かれたのち、

解放され、ロレスターンに来た。彼は、ロルのアタベグ・アフラーシヤーブに反乱を起こさせたが、この者もまた心中反意をいだき、兵をあげた。(Faryumardi, p. 173)

とある。モンゴル人に対する反乱はムザッファルディーンの教唆によるのである。

アフラーシヤーブは平生モンゴル人に租税を納入することの不满をいだき、シャバーンカーラの君侯ジャラールディーンの扇動に影響され、占星術師の意見に動かされていた。アルグンの死をきっかけに反乱を決意したのであろう。アフラーシヤーブ自身とイスファハーンを占領した父の従兄弟キズイルのどちらが先に反乱に踏みきったのかは、判断しがたい、むしろ彼らの間にモンゴル政権を打倒しようとする共通の認識が存在していたことが指摘できるであらう。

さらに、アルグン治世下南イランの土着イラン人王侯の動静は安定していなかったことを指摘しなければならぬ。フラグ、アバガ、テグデルの財務長官でファズルイーエ家の婚族であったシャムスッディーン・ジュヴァイニーの没落は、当時のキリスト教徒からはキリスト教の勝利と考えられていた。ジュヴァイニー家の失脚はムスリム君主テグデルに対する仏教徒アルグンの反乱の結果であることを考えると、これはムスリムにとってはイスラームの敗北と見なしえたであらう。またアルグン・ハンの治世前半に国政の実権を握っていたブカ・チンクサンは地方君侯の人心掌握にも意を用いてアフラーシヤーブ自身彼に近い立場にあった。異なった状況においてはあがあるが、イランのムスリム君主は相次いで庇護者を失ったのである。さらにアルグン・ハンの晩年にはユダヤ人宰相サアドッダウラが国政を独占した。サアドッダウラ自身は彼を憎むモンゴル人貴族に暗殺されたが、この政変と同時に、サアドッ

ダウラがムスリム有力者の一掃を企てていたという噂が広まり、各地の都市ではムスリム大衆によるボグラムが起った。地方統治を巡る国政全般の動搖に加えて、一二九〇年代南イランの政情不安は、ケルマーンのスルタン・ハッジャージのインド亡命（一二七九／八〇年）で始まった。また、ファールスではアバガ・ハンの弟モンケテムルのもとに嫁いでいた女性アタベグ、アビシュ・ハトゥンが一二八七年死亡してサルグル朝は事実上断絶した。アフラーシヤーブの反乱に先だつてはシャバーンカラのムザッファルッディーン、ヤズドのアタベク・ユースフシャーがモンゴルの地方統治に武力で抵抗している。これらの地域の君侯は婚姻によつて相互に結ばれていたので共通の危機意識を大いに高めていたと想定することができるのである。

既にイスファハーンを占領したアフラーシヤーブは、この反乱がイラン支配を求めるものである以上、積極的にモンゴル人の動靜に対処しなければならなかったであろう。『歴史』（Qazwini/Navai, 547）によ

アタベク・アフラーシヤーブは、これをよい機会と考え、自分の好運の原因だと見なした。自分の一族をハマダーンの地方からファールスの海の岸边までの地方の統治権を与えて任命した。モンゴルの首都攻撃を決意した。アタベグ・テキラの息子ジャラルッディーンを辺境守備隊長（yarak）として軍隊と共にカレルード（Kararūd）の溪谷に派遣した。彼らはアミール・トゥーラクの千人隊の四百人（chahār sad）と遭遇して、彼らと戦った。³⁰

とあり、『ムンテハブタヴァーリーフ』（Natanzi/Aubin, 46）によ

アタベク・アフラーシヤーブはこれを自分の（イラン支配の）開始と考え、モンゴル人の支配からイランの国々を一挙に解放しようと心中奮い立った。自ら軍隊の準備に没頭した。自分の息子ジャラルッディーンを前衛としてクーフ・ルードの谷に派遣した。偶然、モンゴル人の部族と遭遇した。

とあり、『ヴァッサーフ史』(Vassaf/Ayati, 151) に於て

アフラーシヤーブは、次ぎに何処に軍隊を率いるべきかをキズイルに相談した。キズイルはシーラーズに行くべきであると言った。アフラーシヤーブはこの進言を選ばず、全体の処置をこうずるべきであると言った。次に、マレク・ジャラールッディーン・ヴァリーアフドとタージュディーン・ラーラーパート、ディクラとキズイルの兄弟マリク・ノスラットを二千の騎兵とともに任命し、アルグスン(Arghsun) 万人隊に属する四百人隊(chahār sadé) が其の地方にテントを張って力と名声を誇っていたので、彼らを攻撃させた。アフラーシヤーブは彼らを破った後はオルドを攻撃しようと望んでいた。

とある。

この部隊を率いたジャラールッディーンは、『選史』には、アタベグ・テキラの息子、『ムンテハブツタワーリーフ』にはアフラーシヤーブ自身の息子、『ヴァッサーフ史』には親子関係には触れずに後継指名者とある。ディクラあるいはタクラ、テキラとは、一二五八年に反逆の罪で処刑されたテキラであろうが、アフラーシヤーブは、テキラの弟アルプアルグーの孫である。テキラに息子ジャラールッディーンがいたことは他史料にはみえないが、アタベク・テキラにこの時丁年の息子がいたとしても不自然ではない。アフラーシヤーブに息子ジャラールッディーンがいたことも他には見えないし、当時まだ年若いアフラーシヤーブに先陣の将の任に堪える年令の息子がいたであろうか。更に、ジャラールッディーンはマリクの称号を帯びているが、この称号は通例地方君侯家の有力な一族に与えられていて、若い王子達が持つものではない。やはり、『選史』にあるようにジャラールッディーンは、テキラの息子であろう。このテキラは他ならぬキズイルと一人兄弟の父親なのであるから、ジャラールッディーンはテキラの息子達の最年長の者であると考えられる。

ジャラルルッディーンが派遣された地点は、『選史』には、「カレルード Kararud」『ムンテハブッタヴァーリーフ』には、「クーフルード Kūhrūd」とある。ミノルスキーとエクバールは、これをカーシャーンの近くのクーフルード Kūhrūd あるいはコフルード Qūhrūd に宛てる。この地名はアダメック⁽²⁾の地名事典にあり、その一つはイスファハーンからテヘラーンに向かう街道七五マイルの、或はカーシャーンから南五〇キロメートル程にあり、北緯三三度四〇分、東経五一度二五分、標高七、二一〇フィートの村である。「この村落はイランで最も快適な場所であり、戸数三〇〇余り、丘の急な斜面に立地してるので、家々はほとんど互いに立ち上がっているように見える。その下にはキャラヴァンサライがあり、その近くの平地には古い城が残っている。様々の丘の間の谷間によく耕され、水量豊で素晴らしい果物を実らせる流れによってたつぷりと灌水された果樹園にはいろいろなものが栽培されているようである。村と果樹園は完全に街道を抑えている。クーフルードの峠（八、八〇〇フィート）はこの村の南側にある。道路は悪く、石だらけである。峠の頂上にはこの川を堰き止めた奥行き四分の一マイルの人工の池があって、きれいな水をたたえている」。この場所は、イスファハーンとゴレバイガーンを結ぶ街道上のメヤーメ（Meyāme）とカーシャーン（Kashān）を結ぶ間道の要所であり、遊牧民の夏の牧地としても可能であると思われる。しかし、大ロールから首都タブリーズ方面に至るときに一旦カーシャーンに出るのは回り道である上に、この時アフラーシヤーブがカーシャーンを占領しなければならぬ特別な理由もみあたらない。

一方、ヴァスイリエヴァ（Bidisi/Vasilieva, t. 1, 507）は、レストレインジの地誌にみえるネハーヴァンドの東イギーライン地方のカラジ（カラフ）ルード Karajrud, Karakhrud に比定している。ソトウーデはこれを今日のアラークの近くとするが、カラフルード Karahrūd の地名はアラークの近郊西南に確認出来る。ヴァスイリエヴァとソトウーデの述べる地名は同一のものと思われる。レストレインジ⁽³⁾は、ムスタウフィーの『心魂の歓喜』『地理篇』を引

用して「ラースマンド Rasmānd 山が平野の北側にそびえて、山の麓にはケイホスロー王の泉と呼ばれる豊かな泉があり、奥行き六里、間口三里のキートゥー Kīta の牧場と呼ばれる牧地を潤してゐる。この牧場はファッラズイーン Farrāzin の城が守っている」と述べる。クーフルード川とはおそらく、『心魂の歓喜』『地理篇』(Qazwini/Lestrang, 69) のガルフルード (Garhrūd) で、今日の河川名ではゴムとハマダーンの間を東西に流れるガウマハー川(の支流で、アラークとカラジ、現在のトゥーレ Ture 間を南北に流れるドアーブ川(あるいは別名カラス川)の上流であろう。この川のダルバンド(狭間)として地名となっている所は地図上には確認できなかったが、ゴレバイガンからイীগーラインに抜ける峠で有ろう。この山地ではヤイラクの地名が散見する。

『選史』によるとアフラーシヤーブは、北はハマダーンに知事として家臣を任命し、また『ヴァッサーフ史』では、オルドを攻撃しようとしていた。ハマダーンはアラークの西北約二〇〇キロメートルである。またオルドはアルグン死亡時はアラーンに、ゲイハトゥ即位の時はアラートにあったが、アラーク以遠はイルハン国の本土であり、アルグン・ハンの埋葬されたソジャース、夏の宮殿が設けられ、ソグルルクの置かれていたタフテ・スレイマーン、行政上の首都タブリーズ等も遠くないのである。中世の交通路では、カーシャーンあるいはゴムを経由してハマダーンに至る経路が本街道であったが、別の経路はゴレバイガン、ホメイーンを通過してハマダーンの手前カラジ、アラーク等に至った。このゴレバイガンは既にユースフシャーの時代から大ロル領であった。すなわちアフラーシヤーブは大ロルから北西に直進しようとしたか、あるいは北からロル領内に入る関門を仰えようとしていたのである。

さて、アフラーシヤーブ軍の攻撃を被ったモンゴル軍は、『ヴァッサーフ史』と『選史』の記述を総合すると、アミール・アルグスの万人隊に属する千人隊の一部であった。

アルグスは、ハルガスン(Hargāsūn)の別名であると考えられるが、ハルガスンの父は、ウリヤングト部に属し

て、スブタイ・ノヤンの一族である大アミールであったが、恐らく、一二六〇年アイン・ジャルートの戦いでキトブカ・ノヤンと共に戦死した。息子ハルガスンは、父親の位を継いで万人隊長を務めた。彼は、アバガの主要な将軍の一人であり、アルグン・ハンの反乱にさいしては、鎮庄に加わらず、アフマド・ハンに捕らえられたアルグン救出に加わっている。⁸⁴

また「チャハールサデ」の領袖であったアミール・トゥーラクは、ウルナウト (Ürnaut) 部アルラート (Arlāt) 氏の人である。彼の名は『集史』『ガザン紀」(Rahsid/Alizade, 3, 305) には、

太刀持のアミール (amir-i selāh) であったウジャン (Üjan) の父方の叔父の息子トゥーラク

とあり、このウジャンについて、『集史』『ゲイハトゥク紀」(Rahsid/Alizade, 3, 231) には、ウジャンの兄弟ビクラミシュ (Biklamiş) の娘のヤス・ウスンが、ゲイハトゥクの側室であったとする。また、「部族志」(Rahsid/Alizade, 1-1, 425-426) には、アルナウト氏の「ブグルジ (Bughūrji) 或はブルジ (Bürüji) の一族に、

今この国に生存しているビクラミシュとウジャン、彼の息子サルキ (Sārūki) が彼の一族である。

あるいは (Rahsid/Alizade, i-1, 431)

この国にはブルジ・ノヤンの一族からは、ベクラミシュとウジャンと彼の息子サルキが記憶されている。スカ (Saka) と共に反乱したという理由で処刑されたトゥーラクと左翼の千人隊長であったトゥグルグ・チェレビはブルジ・ノヤンの兄弟であった。

とある。ブルジすなわちボルジはチンギス・ハンの従士であるから、兄弟とは、弟のこととしても、既に高齢であっただろう。『集史』『フラグ紀」(Rahsid/Alizade, 3, 32) 対イスマイル派戦の記事に名前の見えるトゥーラク・バハドルは、彼であろう。『ヴァッサーフ史』には、トゥーラーク・バーウルチの息子アブドッラーが、チャガタイハン

・バラークとの戦いに加わっている (Vassaf/Ayatī, 42)。アブドッラーあるいはアブドッラー・アガの名前は年代記に散見するが、彼の息子トゥクテムル (Tūqtemur) は、フラグの第五子タラガイの娘アーシール (Āshīl) の婿である (Rashīd/Alizade, 3, 11)。トゥーラクは「部族誌」には、スカの反乱の同調者とされているが、「ガザン紀」では、アルスラン王子の反乱に与して捕らえられ、六九五 (一二九五) 年処刑されている (Rashīd/Alizade, 3, 306)。

さて、アミール・トゥーラク配下のモンゴル軍は『ヴァッサーフ史』に「チャハールサデ (chahār sade)」、『選史』には「四百人 (chahār sad)」とある。文字どおりには、百人隊の数、あるいは四〇〇という数を指しているのであるが、ホズイスターンの財務官にあてたラシードッディーンの書簡⁵⁴には、ホズイスターンに隣合ったイラーク・アラビール州のバヤートで徴収されるタガールは、チャハールサデ、ハルバターン (Chahār sade va Harbatān) の経費に充てられるが、この二つの集団は、

冬の期間キイシュラクをマシュクークとドゥバンダラ (Mashkūk va Dubandār) の平原に置いている

とあるので、これは単に人数を指しているのではなく、モンゴル人遊牧集団の、すなわち千人隊の名前であることが判る。マシュクークとドゥバンダラに彼らの冬の放牧地があり、ジャラールッディーンの攻撃を受けたときは、夏の牧地にいたのである。

さて、アフラーシヤーブ反乱の支配地は、ミノルスキーは「ハマダーン、ファールス、ペルシャ湾に達する地域に親族を派遣し、首都にさえ遠征しようとしていた」、シュプラーもアフラーシヤーブは六九〇 (一二九一) 年に「イスファハーン、ハマダーン、ファールスを占領しようと試みた」、エグバールは「自分の側からハマダーンと海に至るまでのファールスに知事を派遣した」、ソトゥードは「自分の側から知事をハマダーンとイラークの他の地域に派遣した」とする。ハマダーンはカラフルドの二〇〇キロメートルほどであるから、ジャラールッディーンの部

隊は、もしチャハールサデに勝利すればハマダーンに進むことができたかもしれない。またベルシャ湾沿岸では、ホズイスターン東部を既に反乱以前より領有しており、ファールスのクーフ・イ・ギールーイェは、先に述べたようにアルグン・ハン生前より占領したままであったから、アフラーシヤーブの支配はベルシャ湾に及ぶことができた。しかし、明らかにアフラーシヤーブの反対意見により、シーラーズ地方には大ロル軍は進んでいなかった。ここで注目すべきであるのは、大ロル軍はイスファハーンでシャフネ、バイドウの軍勢と戦って以後、カラフルードに至るまでモンゴル軍と接触していないのである。すなわち、これはホズイスターンの平野部にある首都イーザジュを除外しての結論であるが、大ロルの領内にはモンゴル遊牧民は牧地を持つておらず、シャフネも駐在していなかったのである。さらに敷衍することが許されれば、北西イランの「腹裏の地」⁰⁸にモンゴル遊牧民を集中的に配置し、ザグロス山地以南には限られた数のシャフネを派遣して土着社会を監視、統制するというイルハン国のイラン支配体制の一端が示されているのである。

さてクーフルード（カラルード、カラフルード）の戦いの結果は、次の様であった。ロル兵は急襲に成功しては一旦は、モンゴル兵を逃走させた。真つ先に拠点を占領したマレク・ノスラトは岡の上に軍旗を掲げ、太鼓を打ち鳴らさせた。しかし、ロル兵が略奪に没頭する間に、モンゴル兵と家族はヤイラークに引き返し、ロル兵を打ち破った。この時、ジャラールッディーンとテキラは、部下の大部分とともに戦死した（Vassaf/Ayati, 151; Qazwini/Navai, 547; Natanz/Aubin, 46）。

一方、大ロル反乱の報に接したモンゴル人の將軍達は、トゥラダイ・イダチを一万人の軍隊と共にロルのアフラーシヤーブのもとに派遣した。トゥラダイ（Tuladāy ~ Tulādāy）あるいはドゥラダイ（Dulādāy）は、チャガン・タール部人で、アバガの次女トゥガイ（Tughay）フラグ・ハンの第一子モンケテムルの娘アラクトウルグの夫、

フラグ・ハンの第五子タラガイの外舅であった。彼は後ガザン・ハンのバイドゥ打倒後投降し杖刑を受け、ホラーサーンに左遷されたが、フラグ家との度重なる縁組が示すように、当時の大貴族の一人であり、バイドゥ即位後はイラク・アジャムとロレスターン総督に任命されている (Vassaf/Ayati, 173)。

『ヴァッサーフ史』には、トゥラダイの作戦を次のように述べる。

このけしからぬ知らせが、オルドに届くと、まだハンの位は空位であったので、將軍達は、トゥラダイ・イダチを一万の兵とともに追討に派わした。モンゴル軍のイスファハーン接近を知ってロル兵は逃亡した。シーラーズの総督はトゥラダイの下にシュール、トルクメン、モンゴルのジュルメ軍団からなる増援部隊を派遣した。兩軍最初の戦場は、フィールザーンの城壁で、ファールス軍が最初包囲した後、トゥラダイの部隊が更に三日間包囲を続けて、城壁を破り、殺りく、掠奪を欲しいままにしたうえに、一万三〇〇〇人の捕虜を連れ去った。シーラーズとイスファハーンの篤志家の淨財で多くが解放されたが、五千人はそのままモンゴル軍のもとに留め置かれた。次いで、トゥラダイはキズイルを破り、またアフラーシヤブ自身の軍勢と相遇した。ロル兵は山中に散開したので、トゥラダイは五百人の射手をだした。ロル兵も応戦したが、ロルの弓は射程が短かったのでモンゴル兵に敵せずアフラーシヤブは撤退し、タージッディーン・ララバイにしがりを命じてヴィールーフ城 (qal'a-i Viruh) に退却した。アフラーシヤブはそこから更にファズルイーエ朝の本拠マーンギャシュト城に退いた。マリク・ノスラットはアフラーシヤブの形勢の悪いことを見て、モンゴル軍に降伏して先陣を申し出、ヴィールーフ城に入った。モンゴル軍はロルの集落を掠奪して、多数の家畜と捕虜を得て、帰国した (Vassaf/Ayati, 152-153)。

アフラーシヤブが、どの様にしてトゥラダイに降伏したかは、『ヴァッサーフ史』では、つまびらかではない。

『選史』(Qazwini/Navai, 547) には、

ゲイハトゥ・ハンのアミール達からトゥラダイ・イダチが一万のモンゴル軍と小ロルの知事達と共に派遣された。トゥラダイは、ジュイー・サルド方面で、アフラーシヤープに接近した。アフラーシヤープは弱い蠅が強い風を逃げるようにモンゴル軍から逃げ回り、マーンジャシュト城に逃げ込んだ。ロルの兵士の大部分は不幸な剣によって、馬飼のように刈られ、不運な矢の的となった。モンゴル軍はつむじかぜのように山の頂きから下りおりた。ロル人は驚いて、家族を置き去りにして、山の洞穴と洞窟に逃げ込み、あるものは無駄に血を流した。彼らは次に城を取り囲んだ。アフラーシヤープは逃れる術なく、降った。アミール・トゥラダイは彼をゲイハトゥ・ハンのもとに連れていった。

とする。

『ムンテハブッタヴァーリーフ』(Vassaf/Ayati, 46-47) には、先に引用した記事に続いて

この知らせがオルドに伝えられると、ゲイハトゥ・ハンはアミール・ドゥラダイ・エヴダチ(sic)を彼らの追討のために遣わした。

云々とあり、また『選史』の「ゲイハトゥ汗紀」(Qazwini, Navai, 600) では、

アルグン・ハンが死亡したとき、ファズルーイエ家のアフラーシヤープがロレスターンでを反乱を起こし、イスファハーンを占領した。ゲイハトゥ・ハンは軍隊を遣わして、彼らを平らげた。

とあって、鎮圧軍を派遣したのはゲイハトゥ自身であるように記されている。既に引用した『ヴァッサーフ史』では彼を遣したのは、アミール達であった。両テクリストの内容を見ると、『ヴァッサーフ史』では、將軍はゲイハトゥ即位前に派遣され、マーンギャシュト城には至らずに帰還した。ファールス軍について述べられているが、小ロル軍に

ついでには触れられていない。『選史』と『ムンテハブツタヴァーリーフ』では、將軍はゲイハトゥによって派遣され、小ロル兵の増援を得てマーンギャシュトを包囲している。アルグンの死亡とゲイハトゥの即位には数ヶ月の隔たりがある。で、簡単に同一の事柄が述べられているとはできない。むしろ、トゥラダイは、ゲイハトゥ即位の前後にわたって二度大ロルを攻めていると解釈すれば無理がないであろう。また、ソトゥーデは、⁽⁴⁾「(メイボッドの領主) シャラフッディーン・ムザッファルはアタベク・アフラーシヤーブに対して懐いていた友好の面識に従って、アタベクの反乱鎮圧をイルハンに願ひでた。ゲイハトゥ・ハンもこの重要な国事の成就を彼に委ねた。シャラフッディーンは大ロルに赴きアタベクにイルハンに従うよう説得した。アタベクの条件に従って、彼とともにオルドに赴いた。ゲイハトゥ・ハンも彼の罪を許し、このような重大事を戦争と流血なしにやり遂げたシャラフッディーン・ムザッファルに對しても恩寵厚いものがあつた」と述べる。アフラーシヤーブの反乱が最終的に鎮壓されたのは、ゲイハトゥ即位後であることが明かである。アルグン・ハンの没年は一二九一年三月一〇日、ゲイハトゥの即位は一二九一年七月二三日である。ゲイハトゥがトゥラダイ・イダチ派遣に関わっているとすると、アフラーシヤーブの反乱は数か月の間続いたとみなさなければならない。この反乱がモンゴル人のイラン支配の中心地からの近さと広がりのみならず、期間においても重大なものであつたことを知ることができる。

三、反乱の事後処置

『ヴァッサーフ史』(Vassaf/Ayati, 161) には、アフラーシヤーブ降伏の具体的状況には触れず、

ゲイハトゥはアルグン・ハン短命の理由が流血にあると聞かされて、死刑を嫌い、重罪に対しても寛大な処置で臨んだが、彼の寛大さの一例は、ロルのアフラーシヤーブが反乱を起こしたにも拘らず彼のもとに伺候した

時、罪を問わず、それ以前同様にロルの国を彼に授けた。また、アフラーシヤープがキズイルと彼の兄弟達ノスラット、アリー・マレクシャーを殺した時も、イルハンが彼を尋問した時に彼が「彼らは私の敵でした。私と戦って殺されました」と述べると彼の弁解を聞き入れた。

とあり、『選史』(Qazwini/Navai, 547)にも次のようにある。

ウルク・ハトゥンとケルマーンのパードシャー・ハトゥンの執り成しで彼は罰を免れ、ロレスターンの国事は彼に固まつた。彼は、自分の弟アフマドを彼の御前の奉仕につけて、ロレスターンに帰った。キズイル、サルグルシャーと多くの一族、ホージャ・ファフルッディーン・イブン・セラージッディーン、アミール・ハサン・シャフリヤール、タージッディーン・アリー・カーミヤール・アキーリー、アフマッド・ハージー・アスタラーキー、アブータリブ・シャフル・アミール、シャムスッディーン・アフマド・ザンギー、ジャマールッディーン・マフムード・アブルファワーレジュ等の国家の柱、を経験に富んだ見識あるホジャ達ともども、彼らが国の中で権力と威信ある人々だったので殺した。ロレスターンの国の絶対君主となった。

次に『ムンテハブタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 47)にも、次のようにある。

彼の父は奉仕の折に多くの有力な関係を持っていて、常に讃えられていたので、アタベク・ユースフシャーのオールドで気高さの生き承認であるウルク・ハトゥンとケルマーンのパードシャー・ハトゥンは口を出してゲイハトゥが彼の罪を忘れ、ロレスターンの統治権が彼に託されるように願った。アタベク・アフラーシヤープは自分の弟アフマドとキズイル、サルグルシャーおよび親族、ロレスターンの有力者の中から選抜したものを御前に遣わして奉仕させ、自分は統治に専念した。

アフラーシヤープに対する処置は非常に寛大なものであったが、アフラーシヤープの助命をしたのは、二人の

ハトゥンであった。ウルク・ハトゥンは、『集史』「アルグン紀」(Rashid/Alizade, 3, 196)には、

ケレイト部のアミール・サールジェの娘で、イレンジンの姉妹であったが、アルグンの死後、ゲイハトゥと結婚した。

とある。また、バードシャー・ハトゥンは、ケルマンのクトウルグ・ハガン家の出身である。アフラーシヤーブの父ユースフシャーはケルマンのスルターン、ロクヌッディーンの孫であった(Yasaf/Ayati, 149)。彼女もやはり、アルグンの妃であったのが、その死後ゲイハトゥと再婚していたのである。バードシャー・ハトゥンがウルク・ハトゥンとともに、アフラーシヤーブの助命を願ったのは、『選史』や『ムンテハブッタヴァーリーフ』にみえるところの理由からであったかもしれないが、同時にクトウルグ・ハガン家とハザールアスフ家の縁続きであることも指摘しなければならない。シャバーンカラのマレク・ムザッファルッディーン、ヤズドのアタベク・ユースフシャーに對する処置も同様に緩やかなものであった。

『ヴァッサーフ史』、『選史』と『ムンテハブッタヴァーリーフ』の内容には差異があるようであるが、あるいは同じ事柄の別の側面を述べているとも見なすことができる。助命と所領の安堵が認められるとアフラーシヤーブは、弟アフマドを当時の習慣どおりゲイハトのオールドにとどめた。アフラーシヤーブ自身がアルグン・ハンのオールドに長く仕えていたのである。次にアフラーシヤーブは、従兄弟達キズイルとサルグルシャー(『選史』)、あるいはキズイル、ノスラト、アリー、マリクシャー(『ヴァッサーフ史』)を殺した。アフラーシヤーブがキズイルを殺した心情を理解できるであろう。キズイルは最初クーフ・イ・ギールーイェで彼に對して反乱を起こし、また後にはモンゴル人に對する不成功の反乱の原因であるイスファハーン占領を実行したのである。またノスラトはチャハールサデに敗れて、逃げ帰り、形勢利なしとみるとドゥラダイに降伏し、あまつさえ彼の前衛を務めたのである。『ヴァッサーフ

史』にはアフラシヤーブはキズイルと彼の一人の兄弟を恐れていたと述べるが、それゆえにキズイルだけでなく他の父の従兄弟達を殺したのである。『ヴァッサーフ史』には (Vasaf/Ayati, 161)

また、彼がキズイルと彼の兄弟ノスラット、アリー・マリクシャーを殺したので、ハンが彼を召喚すると、彼は彼が私の敵で、私と戦い、戦死しました(と陳述した)。彼の弁解は受け入れられた。

とある。アフラシヤーブが大ロルで絶対的権力を掌握する目的で彼らを殺害したとする根拠はないが、結果として『選史』に見えたとおりアフラシヤーブの権力が強化されたであろうとみなすことができる。またアフラシヤーブは武将の幾人かを殺したが、かつて王朝の名祖ハザラスフが、アラブ系、非アラブ系の諸集団を招いた時、各々の筆頭に記されていたのは、アキーリーとアスタラーキーであった。従ってアリー、アフマドは両集団の指導者であったと考えられる。

しかし、このゲイハト、バイドゥの短い治世が終わってアルグンの息子ガザンがイルハンの位に即くと、ガズヴィーニー (Qazwini/Navā'i, 548) は、

イルハンの王座にガザン・ハーンが即位給われると、アフラシヤーブは御前にまかりで、その国は彼に安堵された。六九六(一二九六/七)年まで。ガザン・ハーンがバグダードを目指し給い、ハマダーンのシャラー(Sharā)に到着されると、アフラシヤーブはロレスタンから御前にまかりで、労いを賜り、帰国の許しを得た。その道すがら、ファールスから帰任途中のアミール・フルクダクと出会った。かれは、アフラシヤーブを引き返させた。そして御前で彼の行状を非難した。彼を御前で失寵させた。彼は敕書の命令で処刑された。ナタンズビー (Natanzi/Aubin, 47) の記事もほぼ同様である。一方、『集史』(Rashid/Alizade, 3, 312)では、フルクダクは、ファールスのシャフネとしての立場からクーフ・イ・ギールーイエを巡る紛争について述べている。

フルクダクがガザンの手に接吻する榮譽を得た時、帝王は彼にファールスの国々の様子を尋ねた。（フルクダクは答えた）私は先ずこのイラン人について奏上します。私がファールスに向かった時、ロルを通りました。アタベクは顔を見せませんでした。またシーラーズから徴税官をクーフ・イ・ギールーイエの徴税に派遣した時は、彼の部下が騒ぎ立て、我々はこの国を剣で取ったのだと申しました。そこからは何も徴税できませんでした。イスファハーンの代官バイドゥ殺害、イスファハーンとフィールーザーンに軍隊を率いて、占領したこととまたそれと同様のふるまいについては、私の口からは申しません。

フルクダクはマングト部人⁽²⁾で、ガザン即位後アナトリアにおけるスカの反乱鎮圧後、シーラーズの国事整理のために派遣され（Rashid/Alizade, 3, 306; Vassaf/Ayati, 202）ガザン側近の高官としてこれ以後も重要な国事に関わることになる。この記事によってクーフ・イ・ギールーイエはファズルルイエ家が領有していたとするものの、徴税はシーラーズの官庁が行っていたことがわかる。かつて、アフラーシヤーブの反乱で殺されたバイドゥはガザンの敵タガチャルの婿であり、チャハールサデ千人隊長トゥラクと彼が属した万人隊長アルグスはバイド・ハン派の人物に属すとはいえ、ガザンはアフラーシヤーブに対して過去の反乱の責任を問うことはなかった。ここで問題となったのは、ガザン朝における使者不供応、クーフ・イ・ギールーイエにおける正当な徴税業務の妨害であった。財政の改革にあったモンゴル人貴族や彼らの使者の側の専横とともに地方官の不法行為のあることを認識していたガザンにとって、アフラーシヤーブの行為が許しがたいと映ったことは十分理解できることである。ヤズドのアタベク・ユースフシャーも反乱の罪自体は問われなかったにもかかわらず、病気を理由にガザンの第一回シリア遠征に出陣しなかったために処刑されている。ここにもガザンの法の執行と秩序の維持に峻厳な改革政治の特徴を見ることができると。

『集史』(Rashid/Alizade, 3, 312-3) には、フルクダクの上奏を聞いて

イスラームの帝王は怒り、アフラーシヤーブを処刑するように命じられた。セバندان村方面に着いた時、シャイフ・マウドゥードとサドルッディーン・ザンジャーニーは人々にジャマルッディーン・ダストジェルダニーを告発させ、五年ズルヒッジェ月二八日（一二九六年九月二八日）裁判を行い、彼を処刑させた。

とある。アフラーシヤーブの処刑は一二九六年九月二八日頃より前であらうが、ガッファリー (Ghaffari/Minovi, 173) は、没年を六九五年ズルヒッジェ月二〇日金曜日（一二九六年五月二〇日）、場所をファラーハーンのマハーヴアンドのガリーイエであるとしている。ファラーハーンは、カラジとハマダーンの間にある地であり、チャガンナウルの牧地の近くである。²² ガザン行幸の道筋であつた。『選史』のシャラーはシャラーフ (Sharah) であらうが、ファラーハーンのやや川下の地名である。

結語

小論は一三—一四世紀の大ロル・ファズルーイエ家の歴史から、アタベク・アフラーシヤーブの治世に限って論じたものであり、概して、アフラーシヤーブがアルグン・ハン死後に起こした反乱に関する地名と年代に紙数を費やした。反乱は複雑な状況のもとで生じている。まず、反乱は一二九一年三月ころの逃亡者逮捕のためのイスファハーン出兵に始まる。アルグン死亡の噂が広まるにもなつて、アフラーシヤーブははじめファズルーイエ家の有力者は公然と意図的な反モンゴル反乱に入った。しかし、大ロル軍はハマダーン県カルフルードでトゥラクのチャハールサド千人隊に敗れ北進の望みを絶たれた。イルハン国はトゥラダイ・イダチを派遣してイスファハーンとフィールーザンを奪い、大ロル兵を山地に逐った。ゲイハトゥ・ハンは同年七月の即位後再びトゥラダイを大ロルに派遣した。トゥラダイはザイヤンデ川を遡ってザグロス山中に進み、アフラーシヤーブが籠城するマーンギャシュト城を包囲

した。アフラーシヤープはメイボット領主の勧めを入れて降伏し、オルドに参内した。イスファハーンのシャフネを始めモンゴル側に多大の犠牲があつたにもかかわらず、ウルク・ハトゥン、パードシャー・ハトゥンの執り成しによって罪を許され、所領支配権を全うした。一二九六年にガザンが彼を処刑したのはこの戦争責任問題が蒸し返されたのではなく、シーラーズの徴税管区に属するクーフ・イ・ギールーイエでの徴税妨害と大ロル領内における勅使の接待に落度があつたためであつた。

この反乱の解明を通してイルハンの地方君主にたいする態度の融和的一面を知るかたわら、モンゴル人のイラン支配の特に武力的限界を知ることができた。アミール・ノウルーズがガザン・ハンにイスラーム改宗を強く迫つた理由は、一三世紀末には既にイスリムの支持なくしてはイラン支配権を確保できないということであつた。これまでこの言葉の含むところの綿密な分析はなされなかつたが、九〇年代前半のイラン南部土着支配者層における動揺、そしてその帰結のひとつであるアフラーシヤープの反乱等を念頭に置いていたであろうことは想像に難くない。ブカの一味に加わつてイスリム君主アフマド・テグダルを倒し、同土ブカの没落に及んでトルキスターンに亡命していた経歴の持ち主であるノウルーズ自身の対イスラーム感の変化を知るとともに、アフラーシヤープの反乱の政治史的奥行き深さを推し量ることができる。

注

- (1) 『弘前大学人文学部文経論叢』第二十一巻第三号、一九八六年。
- (2) イラン中世政治史における継続的要素の分析には、Lambton, A. K. S, *Continuity and Change in Medieval Persia*, New York, 1988 があ¹²。
- (3) ヤズドのガーディーであるニザーム家のワクフ文書の研究には、最近の岩武昭雄氏の口頭発表「ニザーム家のワクフ―一四世紀ヤズドにおけるサイイドの活動―」（イスラーム国家論研究会、一九八八年一〇月二日、東洋文庫）がある。

- (4) 『文経論叢』、第二十二卷第三号、一九八七年
- (5) 『文経論叢』、第二十三卷第三号、一九八八年
- (6) 使用史料、文献は前掲論文と同一なので、ここでは改めて述べることをしない。
- (7) D'Ohsson, *L'histoire des Mongols*, (佐口透訳第五卷) 二四三頁) Minorsky, "Lor Bozorg", p. 47; Abbas Eqbal, pp. 442-443; Sotude, vol. 2, pp. 127; Spuler, *Die Mongolen in Iran*, S. 161-163; Spuler, *Hazaraspis*, 337
- (8) ヤズドのユースフシャーは、反乱の直前に自分の首都の富人々から強奪同様な手段で多額の資金を調達した。アフラーシヤールにもそのような意図があったのかもしれない。
- (9) 既にアタベク・タクラの時代にマーンジャシュト(マーンギヤシュト)は、大ロルの逃げ城となっている。拙稿『弘前大学人文学部文経論叢』第二十二卷第三号、一九八七年、七〇—七一頁参照。
- (10) 拙稿『弘前大学人文学部文経論叢』第二十三卷第三号、一九八八年、八六—八七頁。
- (11) これについて、『ジャラフ・ナーメ』(Britis/Vasiliev, 99)に、「彼は、アタベク・タクラの息子ジャマルッディーンをヤザクの渓谷を経由してカラフルド(Karahrud)のモンゴル人知事の所在地に派遣した」とある。「ヤザク」あるいは「ザク」という地名はハマーンの近くにある(Rashid/Alizade, 3, 312)。
- (12) Adamec, L., *Historical Gazetteer of Iran*, vol. 1, Graz, 1976, pp. 393-4; cf., Givnashvili, J. *Ketab-i Qarayati-Farsi*, Tbilisi, 1980, p. 203
- (13) Yakut al Hamawi, vol. 4, p. 446; Le Strange G, *The Land of the Eastern Caliphate*, pp. 189-199
- (14) 志茂碩敏(Gazan Khan 政権の中核群について—II Khan 国史上における Ghazan Khan 政権成立の意義—)『アジア・アフリカ言語文化研究』一八、一九七九、九〇—九頁。
- (15) Rashid ad-Din, *Perepiska, Period*, vvedenie i komentariya. I. Falinoy, Moskva, 1971, str. 224; *Savutnikh al-fikar rashidi*, j. 5, s. 160
- (16) 本田實信「イスラムとモンゴル」『岩波講座世界史』中世二、一九六九年。
- (17) 志茂前掲論文、一三三—一四四頁。
- (18) Sotude, vol. 1, p. 60. cf. Kutbi/Navai, 5.
- (19) 『清浄園』(Khwandamir/Rezaulikhah, 4, 628)では、ホージャ・ファフルッディーン・イブン・セラージュッディーンが、ガマルッディーン・ユースフ(Qamar al-Din Yusuf)・イブン・セラージュッディーンと、タージッディーン・アリー・カーミヤール・アキーリーが、アキーール・イブン・アビー・タリブの子孫のアリー・カームヤール・アクル(Aql)とそれぞれ異なる

た表記がされ、シャムスッディーン・アフマド・ザンギーとシャマルッディーン・マフムード・アブルファワーレジシュは、同じであるが、他の者は記されていない。

- (㉙) 『清浄園』(Mirkhwand/Rezaqulikhan, 4, 629) には、「私が、ファールスに赴いたときロレスターンを通りました。彼は、余計な出費を避けるために、私達から顔を背けました。一マンの大麦も一束の薬も支払いませんでした。徴税官が税の徴収にクーフ・イ・ギールーイェに赴くとアタベクの代理人達は騒ぎを起こし、アタベクの言葉を引用し、我々はこの国を剣で取ったと言いました。この振舞いのため、何も徴収出来ませんでした。また、ゲイヘトウ・ヘンの時代に彼から生じた統治権の動揺が有りました」。ドーソン(佐口訳、第五巻、三三八―三三九頁)は、これによっている。

- (㉚) 志茂、前掲論文、八五頁。

- (㉛) 『心魂の歓喜』『地理篇』(Qazwini/Lestrangle, 69); Lestrangle, *loc. cit.*, p. 198-199; Boyle J. A., The Dynastical History of the Ilkhans, in “C. H. I.” vol. 5, pp. 3, 55-6° この湖は現在タウラー (Taulā) として知られている。アベカ・ベン即位の地でもあった。

Summary

Atabeg Afrasiyab of the Greater Lor rebelled against the Mongols in spring 1291 and was surrendered at summer in the same year. His life was saved through the intercession of Uruk Khaton a Mongol Lady and Padshah Khaton of Kerman who was his relative. His territory was reassured as before. It was because of his bad treatment to the Mongol ilchis and his disturbance to the tax collection in Kuhgiluye that he was put to death in 1296. The effect of this rebellion was serious to the Mongols because, Afrasiyab was the strongest rocal Muslim lord in the Southern Iran and his domain was very close to the Mongol central land of Northwestern Iran. We may conclude that the main cause of this rebellion was the political unsteadiness among the rocal Muslim lords of Iran in the early 90's. Thus this is one of the most important items which may explanate the conversion of Ghazan Khan in 1295.

